文化の力で大阪に活力を。

OSAKA*文化力

No.101
2008 SPRING・春

リレーエッセイ
私のsweet水都
ダビデ ジリオ 在大阪イタリア総領事

巻頭鼎談
生命科学がひらく大阪・関西の未来
岡田善雄×中村桂子×堀井良殷

大阪ブランド物語
「押し寿司」が名物になるまで

大阪文化考
21世紀懐徳堂がめざすもの
武田佐知子 大阪大学理事・副学長

メセナを探せ
三起商行株式会

財団法人 大阪21世紀協会

関西から文化力
POWER OF CULTURE

ダビデ ジリオ 在大阪イタリア総領事

日本のブランドイメージは、洗練された文化、おいしい食事、科学技術、ポップカルチャーなど、際立ったポジティブなイメージだ。日本人は寛容で、とくに大阪人は日本のほかの地域に比べてとても社交的で、魅力的。“ヒト”という大いなる資産を持っている大阪は印象的だ。ローマでは、外務省で日本と中国のデスクをしていたので、大阪の経済的・文化的な重要性については認識していた。大阪は便利な街で、生活の質（クオリティ・オブ・ライフ）がある。私は自転車を使っているが、自転車に乗るのは安全で居心地いい。大阪ではホームシックを感じないほど、イタリアレストランやイタリア語の商品名をあちこちで目にするし、妻とショッピングに行った際には、家具屋さんと自転車屋さんの2軒の店でイタリア語を話すスタッフがいた。

去年イタリアでは、劇場に行く人の数が、競技場に行く人の数を超えたという統計結果が出た。これは、文化的な変化の兆候を知る歴史的なニュースだ。ロベルト・ベニーニが、ダンテ・アリギエーリの有名な長編詩「神曲」をコメディーとして上演した例がある。「神曲」といえば、イタリア人は15歳から17歳の頃に学び、とても退屈に感じるものだが、ベニーニはこの古いテキストをエンタテインメントにする方法を見つけた。このショーを見るために、昨年は100万人が劇場を訪れたのだ。

また、イタリア人は自己表現の方法としてブログをやっている。これは文化的成熟度として面白い。5700万人口のうち、2500～2600万人の人たちはインターネットを見ている。日本語のブロガーの数は世界で3番目、イタリア語は4番目というデーターがある。ちなみに1番は英語、2番は中国語。世界で多くの人が話すフランス語やドイツ語、スペイン語よりも多いというのは興味深い。また別の統計調査では、1年間に5冊以上の本を読んだ人が、たった5%しかいなかったと出た。このように、イタリアの文化的成熟度には光と影がある。

都市は若い才能、投資を呼び込むために競争している。文化への投資も都市の発展を助ける。大阪は国際的な才能を惹きつけるという点で、どこにも負けていない。水路を使い、観光客を運ぶなど、大阪21世紀協会が取り組む「水の都」再生はエコロジカルでいいアイデアだ。イタリアの経験でいうと、都市におけるGDPの増進は、文化への投資によるところが大きい。イタリアでは、映画祭ほか、哲学祭など、いろいろなフェスティバルが開催されている。とくに人口10万人以下の小さな都市では、生活の質を大事にして、文化を使って自分たちの都市の輪郭を描いている。

イタリアには何世紀にもわたる歴史と多様性がある。それは我々にとって石油のようなもの。過去を掘っていき、成長を生み出す新たな方法を見つけ出す。それはファッションであるかも知れないし、フェスティバルであるかも知れない。それが観光客を惹きつけ、イタリアに足を運ぶきっかけになるのだと思う。

ダビデ ジリオ（Davide Giglio）氏

1966年 12月25日生まれ
94年 3月 イタリア外務省入省
2005年 8月 イタリア外務省 東アジア局 副局長
07年 10月 在大阪イタリア総領事に 着任（大阪市在住）
妻、息子一人の三人家族
イタリア共和国功労勲章（OMRI）カヴァリエーレ章受勲者（2004年）

表紙の人 ／ **武田 佐知子**（たけだ さちこ）氏

大阪大学理事・副学長、文学博士（日本古代史）。2008年4月の「21世紀懐徳堂」オープンに向け、積極的に活動を展開（P9にインタビュー記事）。

大阪21世紀協会広報誌がリニューアル、101号より新しい顔でお届けします。

大阪21世紀協会設立25年、当協会広報誌も、おかげをもちまして創刊101号を迎えました。今号より協会活動をはじめ、大阪を元気にするさまざまな活動に取り組まれている方々や、文化の胎動を新たな誌面でお伝えしてまいります。

生命科学がひらく大阪・関西の未来

今年1月8日実施の本鼎談にご参加いただいた岡田善雄氏が、1月16日に急逝されました。今となってはご生前最後のお言葉となってしまいましたが、本鼎談でのご発言を重く受け止め、今後の大阪・関西の発展に尽してまいりたいと思います。心からご冥福をお祈りいたします。

出席　岡田善雄（千里ライフサイエンス振興財団特別顧問／大阪大学名誉教授）
中村桂子（JT生命誌研究館館長）
進行　堀井良殷（大阪21世紀協会理事長）

連携して競い合う

堀井　今回は、世界で初めて細胞融合に成功し生命科学の父と呼ばれる岡田善雄さんと、JT生命誌研究館館長として多彩なご活動をされている中村桂子さんに、生命科学分野における大阪・関西の優位性、あるいは存在感といったお話を中心に伺います。すでにお二人が大阪におられること自体、世界に大きな存在感を示しているものと思いますが、まずは岡田さんから。

岡田　関東と関西の生命科学研究のしかたはずいぶん違います。ひとことで言えば、関東はインターナショナル。世界の動きに敏感で対応も早い。関西は世界の動きとはあまり関係なく、やりたい研究をするというのが伝統的です。以前、有馬朗人さん（元東京大学総長、文部大臣）から、「なぜ関西はバイオに強いのか」と言われたことがありました。思うに関西にとってありがたいのは、大阪大学と京都大学と神戸大学が非常に近いことが上げられます。そうした距離的なメリットに加え、研究者の相互交流も活発です。例えば阪大の審良（あきら）静男教授（自然免疫学）の研究に京大が大きな関心を寄せたり、アポトーシス研究の第一人者である長田重一教授が、阪大から京大へ研究チームごと移籍するなどといった例は数多くあります。大学双方で研究競争をする反面、一緒にやったほうが得だと思ったらお互い力を合わせる。研究の芽を生む大学と育てる大学、それぞれ特徴のある大学が連携しやすい環境は、生命科学の進歩にとってとても好都合です。関西にはそうしてバイオテクノロジーを発展させてきた歴史がありますし、今後もそうしていくでしょう。千里ライフサイエンス振興財団が入っている千里ライフサイエンスセンタービルが完成したとき、生命科学の発展のためには、大学どうし競合すべきは競合し、助け合うべきは助け合おうという思いから、大阪大学・京都大学・神戸大学のトップ会談を記念企画しました。そこで呼びかけたら、金森順次郎さん（阪大総長）、井村裕夫さん（京大総長）、鈴木正裕さん（神大学長）が揃って駆け付けてくれた。こうしてすぐ集まってくれるというのも、関西の面白いところですね。

中村　どんな人がどんなことをしているのかを知らないと、良い研究が見えてきません。JT生命誌研究館で発行している機関誌では、生命科学分野でパイオニア的研究をされている方を毎号取り上げ、優れた研究者はどんな子ども時代を過ごし、どんなお仕事をなさってきたかをご紹介しています。すでに55人のサイエンティストライブ

ラリーとなりましたが、そのなかから生命科学を開拓した第一世代の方たち15人を選んで、『生命研究のパイオニアたち』という本にまとめました。このなかには岡田善雄さんをはじめ、岡田節人さん、志村令郎さん、早石修さん、花房秀三郎さん、豊島久真男さんほか、関西にゆかりのある方がじつに多い。そのなかで志村令郎さん（遺伝学）は京大の学生時代に、遺伝学の権威である木原均教授に向かって、「遺伝学にはもうすることがない」っておっしゃったんですって。すると木原教授は、「そうじゃない。遺伝学はこれから出発するんだよ」と諭された。つまりメンデル以後の古典遺伝学ではなく、アメリカではものすごく新しい遺伝学がはじまっている。だからそれを勉強しなさいと。戦後すぐに新しい研究の芽生えを感じ取り、若い人たちに伝えるということが、京大、阪大、神戸大という文化の中にあったんですね。

岡田　あのころは楽しかったなあ。よく皆で一緒に研究したもんです。

中村　関西における生命科学の研究は、世界でどれくらい流行っているか、どれくらい最先端に追い付いているかなどという見方をしません。『生命研究のパイオニアたち』でご紹介した方々は、すべて面白いと思ったから研究し、しかも自分流でやってきたっておっしゃっています。岡田さんが「楽しかった」っておっしゃる通り、研究者としての基本である“好きなことをする”ということを大事にするのが関西なんです。とはいえ世界の動きもしっかり見ているのがすごい。流行っているものを追いかけて、一番には絶対なれません。自分が本当に大事だと思えることをやってこそ一番になれる。そういうポテンシャルが関西にあるということを、関西の人に知ってもらいたいですね。岡田さんはその第一世代としてご活躍されました。

岡田　当時は微研（大阪大学微生物病研究所）と伝研（国立遺伝学研究所）で、しょっちゅう交流していました。

中村　相手を蹴落とす競争ではなくって、良い仲間と一緒になって競争するというのが関西の伝統であり土壌だと思います。

クラスターとネットワーク

堀井　連携によって切磋琢磨するという土壌のなかで、元大阪大学総長の山村雄一さん（故人）は、大阪大学医学部や国立循環器病センターなどを発展させ、大阪北摂地域にクラスターをつくろうという構想を立てられました。

岡田　山村さんは私が細胞工学センター長のときに阪大の総長としてこられた方で、ほんとうにすごい人でした。こういう人がおられるなら世の中も悪いことばっかりじゃないなと安心した覚えがあります。その山村さんの構想で、彩都が開発されました。そして奥田東さん（元京都大学総長）は、「けいはんな学研都市（関西文化学術研究都市）」の提言者。その両巨頭のもとで私も仕事をしてきました。

中村　山村さんに代表されるように、生命科学の第一世代の先生方は、ある構想をもってけいはんな学研都市や彩都をつくられました。問題はそれを次の世代がどう受け継ぎ、クラスターとして発展させていくかです。関西はバイオだけではありません。さまざまなテクノロジーが発展するポテンシャルをもっています。だからこそ、まちを開発した後の使い方がとても重要です。もちろん千里ライフサイエンス振興財団や国際高等研究所といった、個別の受け継ぎはなされています。しかし全体としての新たな構想を打ち出すことは、次の世代の重要な仕事です。また、けいはんな学研都市と彩都は別々のものではなく、関西として両方一緒に考えなくてはならないと思います。

中村桂子（なかむらけいこ）氏
1936年東京都生まれ。59年東京大学理学部化学科卒業、64年同大学大学院理学系研究科生物化学専攻博士課程修了、国立予防衛生研究所研究員。三菱化成生命科学研究所部長、早稲田大学人間科学部教授を経て93年生命誌研究館を創立し副館長に。96年大阪大学連携大学院教授となり、2002年より現職。「ゲノムが語る生命ー新しい知の創出」「生きているを見つめる医療ーゲノムでよみとく生命誌講座」など著書多数。

堀井　同感です。けいはんな学研都市と彩都のネットワークをどう組むかは、関西財界の大きな関心事でもありますから。

中村　彩都は現在開発中ですから注目されていますが、けいはんな学研都市の現状もしっかり見てほしいですね。

堀井　華やかな話にはすぐ目がいってしまいがちで…。華やかといえば、新型万能細胞「iPS細胞」の大発見をされた京都大学の山中伸弥教授も、関西と縁が深いですね。

中村　山中さんは神戸大学の出身で、あの研究は奈良先端科学技術大学院大学で行われ、その後京都大学再生医学研究所へ移りました。

堀井　そういう意味では、ひとりの人の活躍を通して、関西の学術インフラがうまく活用されているとも言えるのではないでしょうか。

中村　山中さんは「iPS細胞」の研究を伸ばすには、ただ研究費を増額するのではなく、オールジャパンでやるべきだと言っておられます。とはいえそのコアは神戸、奈良、京都にあるわけですから、山中さんの仕事をきっかけに、大学間の結びつきは一層強くなるでしょう。財界も「iPS細胞」には大きな関心を寄せていますから、企業の研究機関とのネットワークも活性化すると思います。

岡田善雄（おかだよしお）氏
1927年広島県生まれ。52年大阪大学医学部卒業、同大学微生物病研究所助手を経て、72年同研究所教授および細胞工学センター長、90年（財）千里ライフサイエンス振興財団理事長（～2007年）などを歴任。82年文化功労者、87年文化勲章受賞、2000年勲一等瑞宝章。微研助手時代に、遺伝的に異なる2種の細胞をひとつに融合する「細胞融合」を世界で初めて発見。遺伝子治療の研究など、生命科学発展の道を拓いた。

人間全体を見る

岡田　堀井さんは、バイオテクノロジーに何を期待されますか。

堀井　素人考えですが、やはり病気治療に対する期待をもちます。薬で熱を下げたり炎症を抑えるといった対症療法や、悪いところを切除する外科的治療だけではなく、遺伝子レベルで病気を治せるということ。それで癌や糖尿病が治ったり、iPS細胞を使って、悪くなった臓器や血管をオーダーメードで取り替えることができるような、すごい時代が来るのではないかと。

岡田　そんなことになったら、寿命が伸び過ぎてどうなることやら。

中村　遺伝子治療の現状を申しますと、これまでに遺伝子治療で本当に成功している例はありません。遺伝子ひとつで癌を治すなんて不可能です。1970年代に遺伝子組み換えが実現し、それでつくられたインスリンや成長ホルモンが医療で大きな貢献を果たしました。しかしそれで一段落してしまったんです。政府が1996年から2006年までの10年間で、医薬・医療産業がどのように伸びているかという調査をしました。それを見ると、遺伝子に関係するものはこの間まったく伸びていません。しかし、免疫を活性化したりワクチンで予防したりといった、体全体に対応するバイオ産業が伸びています。つまり生命科学の進歩によって、私たちの体はとても複雑で遺伝子ひとつでどうにかなるものではないということが、はっきりわかってきたんですね。山中さんのiPS細胞も、遺伝子1個の話ではなく細胞全体を地道に調べた成果です。そして病気を治すためには、さらにその上の、体全体を総合的に見なければなりません。バイオテクノロジーを堀井さんがおっしゃるような医療につなげていきたいのなら、遺伝子から細胞全体、そして人間全体を見るという発想の転換が必要です。すでに研究者たちはそれに気づいているんですが、研究費を出す国や企業などがそれに気づいてほしいですね。関西にはそうして生命科学を伸ばすポテンシャルがあるのですから。

堀井　岡田さんは遺伝子治療についてどのように見ておられますか。

岡田　遺伝子治療で一番気にかかるのは、治療期間中の安全度をどれだけ見越せるかです。アメリカで、ウイルスを媒介として新しい遺伝子を細胞に付ける治療を子どもに施したら、ウイルス感染症を起して大問題になりました。それを見て日本の厚生労働省は、遺伝子治療を許可するかどうかについてとても弱腰になりました。感染症の急速な広がりを抑える手段として、短期間に限って遺伝子治療を行うことは、おそらく今後も有効だと見なされるでしょう。しかし長いスパンでの治療となると問題は残ります。どこまでが有効で、どこまでがそうでないか、安全度見越しのコンセンサスを得るのは難しい問題です。

中村　糖尿病や高血圧の原因となる遺伝子は、ある程度見つかりました。ではその遺伝子をどうにかすれば糖尿病や高血圧にならないかといえば、そうではありません。結局は普段の食生活に気を付けましょうということになる。食べ物に気を付けて、糖尿病の遺伝子があっても発病しないようにする。医食同源の発想です。アメリカの生命科学の中心的研究機関であるNIH（The National Institutes of Health）でも、生活習慣病治療のためには、オルタナティブ・メディシン（鍼や灸などの代替医学）や東洋医学も本格的に研究しようといわれています。感染症と違って、生活習慣病は子ども時代の食生活なども関係してくるわけですから、その人の一生を眺める医療になると思います。そうすると食べたり運動したりということをセットにして、治療を考えなくてはなりません。私はこれを“ライフステージ医療”と呼び、提案しています。

堀井良殷理事長

次代の研究者と農業科教育

岡田　遺伝子治療の安全度見越しの問題にしろ、医食同源の問題にしろ、バイオの世界にはさまざまな問題があります。生物全体でいえばもっとある。その現状を見て「生命科学はなんだか大変そうやな」と思ってしまう人は、研究者にならんほうがいい。生命科学に憧れる人ではなく、中村さんがお話されたいろいろな問題を「これは面白そうだ」と思う人こそ研究者にしたいですね。

中村　それは大事ですね。「遺伝子でなんでも分かる」だなんて、さもバイオが簡単なことのように言って若い人を引き付けるのでな

く、本当に複雑で難しい分野だけれど、だからこそ乗り越えて一皮むけると面白い。岡田さんの世代はそれをなさったんです。メンデル以来の遺伝学を、細胞やDNAといった分子遺伝学に変えた。それは大きな財産ですが、今は遺伝子だけじゃわからない複雑な問題がでてきています。ここでもう一皮むけると、生命科学がすごく面白くなる。まさしく岡田さんにつづくパイオニアになれます。

堀井　若き研究者へのメッセージとしてそのお話を受け止めるとすれば、さらにそういう研究者になっていく子どもたちの育て方も大切だと思います。教育面でのご意見をお聞かせください。

岡田　子どもは自然のなかで遊ばせたほうがいいと思います。

中村　おっしゃる通りだと思います。自然というのはとても複雑で、考えさせられる。しかも99%知らないこと。そんな中へ放り込んだら、子どもは驚くほどいろんなことを考え、いろんなことをやりだすんです。そして大人は、子どもが自然から発見したことや、探し出した問いにきちんと向き合ってやることが大事。そのために一番いいのは、子どもに農業を体験させることだと思っています。

堀井　私もずっとそう思っています。農業を義務教育の必須科目にすべきだと。

中村　そうですね。私はその考えを新聞に書いたら、喜多方市（福島県）の白井英男市長が読まれて、2007年4月に特区として小学校に農業科を設置してくださいました。そして11月にその小学校へ呼ばれて行ったら、お米は上手にできていたけど、とうもろこしが失敗していたんです。失敗はすごくいい経験です。皆で汗を流して草取りまでしたのに失敗した。だから悔しくて、子どもたちはその原因や対策を一生懸命考えました。また、コウノトリの飛来で知られる豊岡市（兵庫県）でも、小学生が上等のいいお米をつくりました。そこでそのお米をどうするか皆で考えた結果、給食に使おうということになり、市長に直談判して市で買い上げてもらったんです。面白いのはその先。それでちょっと図に乗った子どもたちが、今度はコンビニに行って、「すごくおいしいお米だからおにぎりに使ってほしい」って交渉したんです。すると店長に「このおにぎりは毎日毎日、安定供給しなくちゃならないんだ。君たちのお米はそれができるかい」って聞かれてね。これはだめだと思って引き返した。農業をしてマーケティングまで勉強したんですよ。農業って、子どもたちの可能性をすごく引き出します。だから良い研究者を育てたかったら、子どもたちに農業をさせること。これは私が実際に小学生たちと関わってそう思いました。

岡田　千里ライフサイエンス振興財団では、「千里ネイチャーカレッジ」というのをはじめて10年になります。小学5年生と6年生を集めて、箕面の山の猿や生き物を観察する会です。中村さんにもお手伝いいただいたことがありますね。あるとき40人の子どもを8人ずつグループに分けて、大阪大学の人間科学部の学生たちにリーダーになってもらったんです。すると生き物の観察というより、結局は大学生とわいわい遊ぶほうが楽しいというような格好になってしまいました。小学生は大学生に憧れるようですし、大人が計画して与えるだけではだめだなと思いました。

中村　できあがった大人より、子どもにとっては大学生のほうが学ぶことが多いかも知れませんね。

堀井　大学間の競争と交流が生命科学を発展させるという岡田さんのお話、病気治療には人間全体を見ることが必要だという中村さんのお話。そして関西の「面白いからやってみよう」という精神や、次の世代の研究者を育てるためのお考えなど、生命科学がひらく大阪・関西の未来にむけて、とても意義深いお話を伺いました。本日はどうもありがとうございました。

（ホテルグランヴィア大阪 ／大阪市北区）にて

中村桂子氏 編著

「生命研究のパイオニアたち」

世界をリードする15人の日本人

株式会社化学同人
（2007年12月10日発行）

同書で紹介されている関西ゆかりの研究者（一部）

岡田節人　（前JT生命誌研究館館長・名誉顧問／京都大学名誉教授）
1927年兵庫県生まれ。50年京都大学理学部卒業後、同大学院卒業。大学院生時代、生物の獲得形質（学習や訓練によって後天的に身に付けた能力や体のつくり）は遺伝するという「ルイセンコ説」が席巻するなか、それに惑わされることなく、イモリの胚を使った地道な研究で実験発生学を大成した。

志村令郎　（京都大学名誉教授）
1932年山梨県生まれ、56年京都大学理学部植物学科卒業後、同大学院卒業。RNAに関する研究で学士院賞を受賞。科学的直感を重視し、学生時代に遺伝学の権威・木原均教授に「遺伝学にはすることがない」と直言したり、ノーベル賞受賞のジャック・モノー博士の研究室入りを断るなどの武勇伝をもつ。

豊島久真男　（東京大学・大阪大学名誉教授）
1930年大阪生まれ、54年大阪大学医学部卒業後、同大学院卒業。1961年、ポリオウイルスによる小児まひの大流行を機に、阪大助教授の職を捨て大阪府立公衆衛生研究所でポリオウイルスの遺伝学とその応用研究に没頭。その経験がもとで、後年、がん遺伝子の存在を世界で初めて明らかにした。

花房秀三郎　（ロックフェラー大学名誉教授）
1929年兵庫県生まれ、53年大阪大学理学部化学科卒業。大阪大学微生物病研究所助手になったのち、1961年米国へ留学。細胞内にがん遺伝子が存在することを発見し、世界中を興奮させた。照子夫人は大学時代の同級生。微研時代から米国で夫人がで亡くなるまで、研究の苦楽を共にした。

早石 修　（京都大学名誉教授／大阪バイオサイエンス研究所名誉所長）
1920年米国カリフォルニア生まれ、42年大阪帝国大学医学部卒業。軍医を経て、終戦後は大阪大学微生物病研究所で研究に従事。貧弱な実験設備のなか、当時貴重なトリプトファン（アミノ酸の一種）を用いてバクテリアの増殖を研究。後年、酸素添加酵素や睡眠物質の発見へとつなげた。

平成19年度

文化庁芸術祭賞・関西元気文化圏賞

合同贈呈式（平成20年1月24日 ホテルニューオータニ大阪）

「殯（もがり）の森」の河瀬監督に大賞を贈呈

関西元気文化圏推進協議会（代表委員・秋山喜久関西広域機構会長）は、文化を通して関西から日本を明るく元気にした人や団体に対し、感謝と一層の活躍を期待して毎年「関西元気文化圏賞」を贈っている。今年はその第5回。贈呈式は文化庁芸術祭贈呈式と合同で大阪で開催され、池坊保子文部科学副大臣や青木保文化庁長官らが列席のもと大賞ほか各賞が贈られた。

大賞は、奈良を拠点に活動する映画作家・河瀬直美氏に贈られた。河瀬氏は、奈良市郊外の山村を舞台に認知症老人と介護福祉士の心の交流を描いた「殯の森」で、昨年5月の第60回カンヌ国際映画祭コンペティション部門での、グランプリ（審査員特別大賞）を受賞。日本人による同賞受賞は17年ぶり、さらに日本人女性初という快挙が多くの人に感動と希望を与えたとして、その功績が讃えられた。

また、同協議会特別賞は、国宝・彦根城築城400年祭実行委員会に、ニューパワー賞はバイオリニストの神尾真由子氏、京都国際マンガミュージアム、和歌山県立紀北工業高等学校生産技術部に贈られた。

河瀬直美氏受賞スピーチ（一部）

関西は面白いところです。大阪、奈良、京都、和歌山など、それぞれカラーが違う。そうした特徴ある地域が手をつなげば、もっと面白くなれるでしょう。

かつて河井隼雄先生は、私の映画を見て「目に見えない日本の文化を表現している」とおっしゃってくださいました。今後もそれを続けていければいいなと思っています。

カンヌでは、関西や奈良のことはほとんど知られていません。そこでもっと知ってもらうために、2010年の平城京遷都1300年を機に、奈良で国際映画祭ができればいいなと思っています。さらにそれを継続させて50年経てば、奈良は世界に誇れる文化都市になっている。そんな日を夢見て、縦横のつながりを編み目のように広げ、世界に発信していきたいと思っています。ありがとうございました。

関西元気文化圏とは ――

平成15年（2003年）3月17日発足のプロジェクト。提唱者は当時文化庁長官の河合隼雄氏。東京一局集中を是正し、文化や歴史の蓄積のある関西から、文化力で日本に元気を発信していこうという趣旨のもと、関西の経済団体や地方公共団体の代表者による「関西文化圏推進協議会」が設立された。文化庁と関西の自治体や企業、文化団体など、官民の垣根を越えた積極的な協力体制のもと、コンサートやシンポジウムなど多彩な文化活動を展開している。平成20年1月現在の参加府県は、福井、滋賀、京都、三重、奈良、和歌山、大阪、兵庫、徳島の2府7県。

検証・大阪ブランド 食

「押し寿司」が名物になるまで

大阪の郷土料理

農林水産省は平成19年12月、全国の人気投票をもとに「郷土料理百選」を選定した。そこで大阪の郷土料理に上げられたのが、箱寿司と白みそ雑煮。大阪といえば「たこ焼き」「お好み焼き」一辺倒なイメージで語られることが多いだけに、この結果は大阪の多彩な食文化を示すよい機会ともいえる。

元来、大阪で寿司といえば押し寿司をさす。すし萬（1653年創業）の小鯛雀鮨、吉野鮨（すし）（1841年創業）の箱寿司、よし常（1891年創業）のバッテラなどが先駆で、歴史は古い。とはいえ老舗で旨いというだけで、その名が広まったわけではない。歌や芝居で語り継がれたり、宣伝で話題を呼ぶなど、“パブリシティー効果”に負うところも大きい。

虎造効果

「江戸っ子だってねぇ」「寿司を食いねぇ」で知られる浪曲『石松三十石舟道中』。戦後一世を風靡した広沢虎造（1899～1964）の創作だが、ラジオからテレビの時代になって浪曲が聞かれにくくなった今でも、このセリフだけは全国的に有名である。しかし、その寿司が大阪の押し寿司であることを知る人は、もはや少ない。

物語は幕末・文久2年の春、場所は大阪・天満橋近くの八軒家浜。次郎長の遣いで金比羅参りを済ませた石松が、清水への帰途、八軒家浜から三十石舟に乗って伏見へ向かう。その舟中で豪傑比べに興じる乗り合いのひとりが、「海道一の大親分は清水の次郎長だ」と言い出すや、待ってましたとばかり話に割り込む石松。子分である自分の名前を言わせようと、酒と寿司で機嫌を取るくだりが面白い。虎造は、石松が買い込んだ寿司を「大阪本町橋の名物・押し寿司」と紹介している。

「飲みねぇ、飲みねぇ、おい飲みねぇ。寿司を食いねぇ、寿司を。
もっとこっちへ寄んねぇ。江戸っ子だってなぁ」
「神田の生まれよ」
「そうだってねぇ～。そんなになにか、次郎長にはいい子分がいるかい？」

酒と寿司をはさんだ二人の情景が目に浮かび、終わってみると押し寿司で一杯やってみたい気にもなる。さすがは名人上手。虎造が寿司業界に果たした功労は図り知れない。

宣伝と継承

虎造といえば、橋本寅蔵こそが「箱寿司」の生みの親。船場・吉野鮨の3代目店主で、発案は明治20年頃。きれいで味のよい箱寿司は気のきいた手土産としても重宝され、とくに商家の旦那衆に好まれた。とりわけ5代目の芳蔵という人は船場旦那衆の中でも遊び心の長けた人物で、昭和31年、自ら世話人となって当時北浜にあった三越百貨店で「諸国寿司くらべ」という催しを行っている。30台ほどの人力車を連ねてパレードをしたり、落語会を同時開催してひいきの桂春坊（現・露の五郎兵衛）に「鮨喰い」という一席を演じてもらうなど、大宣伝につとめた。露の五郎兵衛は著書『上方落語のはなし』のなかで、「鮨喰い」の台本の表紙に「吉野鮨宣伝用と朱書きしております」と述懐している。

さらに現在の支配人・大山雄市さんは、寿司職人の講習会やPR用に、箱寿司の製法を解説したビデオまで制作した人。「箱寿司を大阪食文化のひとつとして残し、継承していく使命を感じています」と、自社のノウハウを公開するに惜しみない。

大阪ブランドコミッティは、『大阪ブランド資源報告書（食パネル）』のなかで大阪の食に関する情報発信力の強化を上げ、幅広い波及効果のあるPRを強調している。吉野鮨の「箱寿司」が名物といわれるのも、その発案の妙に加え、なんとしても広めたいという熱意があったからである。

大阪ブランド資源報告書
「伝統と革新が融合した大阪の食」は
ホームページでもご覧になれます。
http://www.osaka-brand.jp/panel/index.html

箱寿司（吉野鮨）

大阪ブランド情報局は、大阪のさまざまなブランド資源情報を発信するホームページです。

大阪の多彩な人パワーを発信 ――
大阪ブランド情報局「多士彩才」

コーナー開設!!

「なにわ八百八橋」と呼ばれたように、かつて水の都大阪にはたくさんの橋がありました。そのうち幕府が架けた公儀橋はわずか12橋。残りは町人たちが自らの浄財によって建設した町橋でした。このように、大阪には民がまちを支える伝統があります。

時代は変わっても、その“民”パワーは健在。文化やまちづくりなど様々なジャンルで、大阪のまちに魅力と活力をもたらす人々がいます。そんな大阪の元気人たちを紹介するコーナー「多士彩才」を、大阪ブランド情報局に開設しました。

昨今、何かにつけ「大阪に元気がない」といわれますが、どうしてどうして。水辺の魅力に魅せられ川から大阪の魅力を発信しようと奔走する人、大阪発・映画の可能性に賭ける人、躍進著しい上海をターゲットに大阪・関西の魅力をダイレクトに発信する人などなど…。

大阪ブランド情報局 トップページ

こうしたユニークでエネルギッシュな人々の活動こそ、何にも勝る大阪の宝です。

「大阪を元気に」というまでもなく、「大阪は元気」であることを、このサイトから発信していければと考えています。今後も注目のクリエーターやアーティスト、プロデューサーなどが続々登場します。どうぞご期待ください。

大阪から映画を!織田作之助をこよなく愛する映画監督
金秀吉さん（有限会社Kクリエイト・コーポレーション代表）

なにわ淀川花火の仕掛け人
小嶋淳司さん（がんこフードサービス株式会社代表取締役会長）

大阪から上海へ。情報をダイレクトに発信!
古月幸江さん（チャイナステージ有限会社代表）

ニックネームは「水辺かおり」水都の魅力を発信する
吉崎かおりさん

銀行のポテンシャルをフル活用しアーティストと企業をつなぐ
藤原明さん（りそな銀行地域サポート本部アドバイザー）

アートの“縦割り”打破!諸ジャンルの複合をめざす
小原啓渡さん（大阪市立芸術創造館館長）

映像で大阪の魅力を発信!

ラサール石井さんの生家付近にて▶
（大阪市住吉区）

知られざる大阪の魅力を全国にアピールすべく、大阪ゆかりの映画監督やタレントがその魅力を語る動画シリーズをリリースします。登場するのは、岸和田を舞台に映画『ビートキッズ』を制作した塩屋俊さん、大阪出身の作家織田作之助をテーマに大阪発の映画を構想する金秀吉さん、そして大阪出身のタレントのラサール石井さん。三者それぞれの思いが込められた三つのショートムービー、どうぞお楽しみに!

■ 動画は大阪ブランド情報局ホームページでご覧いただけます。

武田佐知子氏に聞く――

大阪ルネッサンスのさきがけ

「21世紀懐徳堂」がめざすもの

今年4月、大阪大学（豊中キャンパス）に、『21世紀懐徳堂』がオープンする。懐徳堂は江戸時代に大阪の町人がつくった学問所。福澤諭吉らを生んだ適塾とともに、大阪大学の源流といわれている。その復興に携る同大学理事・副学長の武田佐知子教授（日本古代史）に、大阪人の学問のしかたについて聞いた。

武田 佐知子（たけださちこ）氏
文学博士（東京都立大学・1985年）。大阪外国語大学准教授、同教授を経て、2007年10月より大阪大学大学院文学研究科教授。サントリー学芸賞受賞（1985年）、紫綬褒章受章（2003年）など。「衣服で読み直す日本史ー男装と王権（朝日新聞社）」ほか著書多数。

大阪大学・吹田キャンパスに

知財を眠らせない

江戸時代の大坂の人々には、金儲けの手段としてではなく、純粋な知的好奇心による学問探究の気概がありました。これが懐徳堂や適塾を生み、近世日本の知財を結集して素晴らしい人材を輩出してきました。21世紀懐徳堂もまた、大阪大学の知財を活用して社会に貢献するものです。地域の方々、自治体、企業などとコラボレーションし、多彩なカルチャー活動を目に見える形で発信すること。そして大阪人が伝統的にもっているセルフラーニングの気運を高めることで、町の活性化に寄与したいと思っています。

具体的な活動としては、豊中キャンパスのイ号館に21世紀懐徳堂をオープンし、各種の市民講座をはじめ、多目的スタジオやギャラリーも備えて、演劇や芸術などさまざまなパフォーマンスを学生も市民も一緒になって創り、かつ鑑賞できるようにしたいと思っています。また、大阪大学には社会貢献の拠点として『中之島センター』があります。21世紀懐徳堂はここも活用し、さらに次の段階として、現在開発中の梅田北ヤードへの進出も考えています。保育施設をつくって若いお母さんやワーカー、定年退職者などが勉強したり、映画や演劇を見たりできるようにしたい。そのように積極的に都心へ打って出ようと、構想を練っているところです。

大阪大学の課題

大阪大学は平成19年に大阪外国語大学と統合して、学生数では日本最大の国立大学になりました。キャンパスは吹田、豊中、箕面にありますが、将来的には中之島センターや北ヤードにも学生を集めたいですね。都心に学生が集まることは、町の活性化にも重要です。そうして知のボルテージを上げることで、大学と町が共に栄える。かつての大阪がそうであったように、今、21世紀懐徳堂を契機として、大阪ルネッサンスを仕掛けていきたいと思っています。

また現在、大阪大学では多くの学部がそれぞれ市民向けの講座を開催しています。中之島センターでも、天神祭に関する講座や上方落語をテーマにした講座など、人気の高い講座が開かれています。しかし、大阪大学全体として、今、どのような講座があるのかが分かりにくい。そこで、阪大で何をしているかすぐ分かるようなポータルサイトを整備する計画があります。また、大阪外大と統合したことで、外国語学部の知財が増えました。これは、阪大の国際的な情報発信力の強化を意味しています。私たちは今、こうした自らのコミュニケーション力を高めることを、非常に重要な課題としています。

大阪人の自信と誇り

21世紀懐徳堂という名には、かつて大阪は学問の都であったことを、懐徳堂を象徴として知ってもらい、大阪をもう一度元気づけたいという願いが込められています。大阪は「たこ焼きとお笑いと儲かりまっか」だなんて、いつ誰が言い出したことなんでしょうか。近世大坂の成熟した大人の文化は、知的好奇心の豊かな町人が育んで来たものなんです。

「難波津に　咲くや木（こ）の花　冬ごもり　今は春べと　咲くや木の花」という歌があります。4世紀末、百済から渡来した王仁の作だといわれていますが、それが歌い継がれ、7世紀ごろには日本中で手習いの手本にされていたことが、各地で出土した木簡で明らかになっています。これってすごいことですよ。大阪は古代にはすでに国際港湾都市として有名で、現在の中之島の近くには難波館（なにわのむろつみ）と呼ばれる外交使節の客館がありました。このように大阪には古い歴史と学びの文化があるのだということを再認識し、大阪人の自信と誇りを取り戻してほしいですね。21世紀懐徳堂もその一助として、市民と大阪大学の知財をつなぐ媒介になりたいと思っています（談）。

三起商行株式会社

北京五輪での活躍に期待!

スポーツ支援で子どもたちに夢を

子ども服のトップブランドメーカー、ミキハウスのメセナ活動の主軸はスポーツ支援事業。柔道の野村忠宏、薪谷翠、卓球の平野早矢香、アーチェリーの守屋龍一、北畠紗代子ら、世界トップレベルのアスリートがミキハウススポーツクラブに所属している。

澤井 英光 氏
三起商行株式会社
社長室 室長

「企業のスポーツ支援といえばPR活動の一環という印象が強い。でも私たちはそれを広告とは切り離して考えています。今の日本のスポーツ界では高校や大学を卒業後、選手として競技生活に専念できる環境が整っていません。私たちは選手を社員として迎え入れ、自由な競技活動を認めています。夢に向かってひたむきに頑張っている人を全社で応援していこうというものです」と語る社長室室長の澤井英光氏。選手は社員待遇のまま、それぞれが練習したい場所で練習し、そこから大会に出場する。ミキハウスのユニフォームを着ること以外、会社に拘束されることもなく、メディアへの露出は会社の広報が担当。さらに競技活動に関わる遠征費などの経済的支援も受けられる好待遇に引かれ、支援の申し込みは年間100件を越えるという。

きのくに子どもの村学園
子どもの夢や個性を大切に、体験学習中心の授業が行われている。

ミキハウス柔道教室
日本の、世界の柔道をリードしてきたミキハウス柔道部による、子どもたちのための柔道教室。近隣だけでなく京都や和歌山から通う子どももいる。

選手たちは大会がないときは小・中学校に招かれ講演会を開いたり、子ども対象のミキハウスジュニアスポーツクラブでの指導を行う。また八尾市にある柔道場では無料で柔道教室を開催。トップクラスの選手を教えるコーチ陣が、礼儀からきちんと指導。ときにはメダリストもやってくる。スーパースターのような存在の選手に直接、教えてもらう経験は、子どもたちに感動を与え夢も大きくふくらむことだろう。連日、子どもたちの元気な声で活気にあふれている。

経済的支援では、和歌山県橋本市にある『きのくに子どもの村学園』を設立時からサポート。この学園はフリースクールといわれる形態をとり、学年をつくらず、子どもがしたい活動でクラスを選ぶというもの。学園の理念と子どもの夢や可能性を広げるというミキハウスの精神が合致したことから支援が始まった。

「子どもが夢をもって生きていけること、がんばろうと思えることを私たちはとても大切にしています。ファッションだけでなく、もっと広く子どもをとりまく環境を整備していく。メセナ活動もその一環です」

今年は北京でオリンピックが開催される。ミキハウスではすでに6選手の出場が決定(2008.1月現在)。やはり社員が出場するので意気込みも違うという。テレビ中継が深夜の日でも社員がホールに集まり、大型ビジョンでの応援で盛り上がる。

「選手が活躍すれば、社員の志気も高まり仕事にも熱くなれます」スポーツ支援のメセナは、そんな無形のメリットもあるという。

三起商行株式会社 本社
大阪府八尾市若林町1丁目76-2
http://www.mikihouse.co.jp/

大阪発・映画の可能性

第6回 21cafe

（平成19年10月30日／大阪市北区：レーベルカフェ）

映画監督の金秀吉（キム・スギル）氏をゲストに招き、大阪での映画づくりについて聞いた。金氏がいま作ろうとしている映画は、大阪をこよなく愛した小説家・織田作之助の生涯。33歳で夭逝したオダサクと妻・一枝の二人を主人公に、戦前の洗練された大阪の街のイメージを伝え、戦争が近づくなか人生をギリギリまで楽しもうとしていた人々を描く。東京と大阪でクルーを集め、ワークショップ形式で製作するという。大阪における映画人材の能力向上がねらいだ。「映画の街としての大阪の可能性は、大阪発の良質の映画を一本ずつ作っていくという方法にある」。金氏は、大阪で映画を製作することで、製作費用の多くは大阪の街で循環し、大阪経済の活性化にもつながるとも強調した。

企業だからこそできる社会貢献

第7回 21cafe

（平成19年11月28日／大阪市北区：レーベルカフェ）

りそな銀行のREENAL（リーナル）プロジェクトのプロデューサー・藤原明氏がゲスト。REENALとは、りそな銀行が中心となって行なう企業や地域とのコラボレーション事業。ラジオ局のFM802とコラボレーションして、若手アーティストの作品をキャッシュカードのデザインに採用したのがはじまりで、企業・大学・商店街など、さまざまな団体とのコラボレーション企画を手掛けてきた。イベントを仕掛けたり、フリーペーパーや雑誌を作ったり、商品を開発して流通させたりと、地域のポテンシャルを活かした多種多様な展開を行なっている。「プロジェクトを通じて新しいマーケットを創造できれば、本業を果たしつつ社会貢献することができる」と藤原氏。さまざまな企業と関わる銀行の立場を活かし、大阪のまちに新たなムーブメントを起している。

若手アーティストの作品を採用したキャッシュカード

新・都市の時代 ― 創造都市の発展と連携を求めて

世界創造都市フォーラム 2007 in OSAKA

（平成19年10月24日～27日／大阪国際交流センター、大阪市役所）

映像や音楽、美術などの創造産業の発展に伴い、ハイテク技術者やアーティストたちが好んで暮らし、活動する『創造都市』。その世界的な波を受けて、各都市がネットワークを組んで発展する可能性を探るべく、国内外の研究者や都市政策担当者が議論し、交流を深めた。25日の国際シンポジウムでは、チャールズ・ランドリー氏（英国・シンクタンク「コメディア」代表）が、『創造都市と文化的多様性』をテーマに講演。世界各国の街角にあるアートや広告、商品陳列などを映像で紹介しつつ、「新しい商品やサービス、考え方などの出現するスピードが早い都市では、選択肢の多さや多様な価値観がストレスを生んでいる」とし、それが人々の正しい判断力を低下させないかと危惧した。また、「人種や世代など、複数のアイデンティティーをもつ都市ではステレオタイプな表現は意味をなさない」など、多彩な視点で問題を提起した。

チャールズ・ランドリー氏

平成19年度 大阪文化賞・大阪芸術賞・大阪文化祭賞

贈呈式&記念コンサート

（平成19年11月3日／大阪国際交流センター）

昭和38年にはじまり、大阪の文化・芸術の振興に多大な貢献をした人に贈られる「大阪文化賞」「大阪芸術賞」「大阪文化祭賞」。その贈呈式と記念コンサートが、昨年・文化の日に開催された。式典プログラム第二部の大阪文化祭賞では、グランプリの豊竹咲大夫さん（浄瑠璃）や日本テレマン協会（室内管弦楽・合唱など）、同賞奨励賞の菊若啓州さん（三味線など）、南部靖佳さん（フルート）や二塚裕美さん（ピアノ）が式に出席し、賞の贈呈が行われた。また、大阪フィルハーモニー交響楽団による記念コンサートも行われ、1000人の来場者が演奏に聴き入った。

新進アーティストの登竜門!!

アートストリーム イン サントリーミュージアム

（平成19年11月3日・4日／サントリーミュージアム［天保山］）

プロ・アマ問わず、才能ある若いアーティストに発表と業界関係者との出会いの場を提供。公募審査で選ばれたアートマーケットとライブペインティング（約100組）が、イラストやオブジェなど、レベルの高い作品を披露した。また、優れたアーティストに贈られるアートストリームアワードでは、大阪デザイナー専門学校の平野利幸さん（23）が大阪21世紀協会賞を受賞。「こんな大きな賞は初めて。ブースではお客さんの反応がじかに伝わり勉強になった」と笑顔で話した。一方、大阪湾をバックに行われたライブペイントでは、畳3枚ほどのキャンバスに手際良く描かれるようすを、観客が見つめた。来場者は2日間で約1万5千人。潮風を感じながら、さまざまな年代の人が多彩なアートの熱気に触れた。

平野利幸さんと作品「レインボー」

蔵屋敷跡と橋の起源をたどる

水都大阪再発見クルーズ

（平成19年11月18日／土佐堀川～堂島川～大川）

水辺の魅力を再発見し、船舶会社などに付加価値のあるクルーズを提案するパイロット事業として、当協会の主催で開催された。第1回目のテーマは「天下の台所～蔵屋敷と橋～」。大阪市立大学教授・谷直樹氏を講師に迎え、一般応募の75人がアクアライナーに乗り、土佐堀川～堂島川を巡った。

参加者は中之島の周囲を巡り江戸時代の地図を見ながら、当時の蔵屋敷の様子や水運の営みの解説を聞いた。一時上陸した広島藩蔵屋敷跡では、遺構発掘時の写真などに興味深く見入る姿も。「川を配して橋と蔵屋敷がつながる。そんな天下の台所を追体験できる設備が必要」と谷氏。第2回は1月27日、「川から巡る大阪の建築今昔」をテーマに大阪人間科学大学教授・植松清志氏の解説で開催された。第3回は3月9日の予定。

OSAKA光のルネサンス2007

東横堀川ライトアップ 2007

（平成19年12月10日～25日／東横堀川・高麗橋～平野橋）

水辺に浮かぶ LIGHT BOARD

（平成19年12月21日～24日／京阪淀屋橋港東側護岸）

水の都・大阪の新たな魅力創造を目的に、「OSAKA光のルネサンス2007」と連動して、光による夜間景観づくりが大阪市内2か所で行われた。ひとつは水都大阪2009の舞台にもなる東横堀川で、阪神高速道路の橋げたや防音壁を色とりどりのライトで照らすもの（東横堀川ライティング実行委員会主催）。多数のLEDやハロゲンを光源にして、春（桜）、夏（花火）、秋（いちょう）、冬（雪）のイメージを映し出し、200メートルにわたって幻想的な夜の景観を浮かび上がらせた。また、大阪21世紀協会は水上バスの淀屋橋港東側護岸に光のメッセージボードを設置。光のルネサンス会場と一体感のある演出で、「水都大阪」をPRした。

東横堀川でのライトアップ

淀屋橋港でのメッセージボード

第3回 水都大阪再発見クルーズ

と き：平成20年3月9日（日）
場所：中之島・大川周辺

お問い合せ：大阪21世紀協会（水都・創造プロジェクト）
TEL 06-6942-2003

テーマは「水都大阪　川と文学を語る」。夙川学院短期大学教授の高島幸次氏の解説で、近松門左衛門や与謝蕪村、宮本輝らが作品に描いた大阪の水辺の舞台をクルーズ船で巡ります。行程は中之島から毛馬閘門を経由して淀川まで、2時間半程度を予定。古き良き時代の、水の都大阪の風情に思いを馳せるクルーズです。

八軒家浜桟橋・川開き関連イベント

と き：平成20年3月29日（土）
場所：八軒家浜桟橋（大阪市中央区）

お問い合せ：大阪21世紀協会（水都・創造プロジェクト）
TEL 06-6942-2003

平成20年3月29日に八軒家浜桟橋（大川・天満橋付近）が開港しますが、これを機に大阪21世紀協会ではこの桟橋の活用を念頭に、「水都大阪」活性化につながる新たなイベントなどを検討しています。また、今後も大阪21世紀協会では地元やNPOなどと連携を図りながら、淀川舟運発祥の地から恒常的な賑わいづくりをめざします。

2008 FIG トランポリン ワールドカップシリーズ 大阪大会

と き：平成20年5月17日（土）個人競技予選
18日（日）シンクロ競技予選、個人・シンクロ競技決勝
場所：大阪府熊取町立総合体育館（ひまわりドーム）
（JR阪和線熊取駅からつばさが丘行きバス15分）

お問い合せ：実行委員会事務局 ／ TEL 06-4396-2008
ホームページ：http://www.2008wcup.jp/

日本で初めて開催されるワールドカップシリーズ大阪大会は、約20か国が参加し、北京オリンピックの前哨戦として注目されています。トランポリンワールドカップシリーズは、2年間に世界各国で開催され、そのポイント獲得上位8名（チーム）がファイナルに進出してワールドチャンピオンを決定。現在、日本男子チームは個人（上山容弘）、シンクロ（上山容弘・外村哲也組）共に世界ランキング1位で、金メダルが期待されています。競技は約7メートルの空中で10回のジャンプを行い、多くの回転とひねりをより高くより美しく、トランポリンの中央で演技します。またシンクロは、2人の同時性も得点対象となります。

上山容弘・外村哲也組の競技

進捗レポート　― 水都大阪2009実行委員会 ―

都市魅力創造ムーブメント

「水都大阪 2009」

水陸両用バスの車体で「水都大阪 2009」をプロモーション

水都大阪2009実行委員会は、PR活動の一環としてNPO法人大阪・水かいどう808が運行する水陸両用バスの車体に『水都大阪2009』のオリジナルデザインを施しました。このバスは平成19年12月1日から定期運行しています。

デザインは、かつて縦横無尽に川や堀が走っていた『水の都大阪』をイメージして、アーティストの日比野克彦氏が大阪市立育和小学校の4年生131名と共に制作。子どもたち一人一人が10m四方の布に絵具やスポンジなどで「みずのみち」をつくり、友達の「みち」とつないで大きな「みずのみち」を完成させた後、日比野氏がバスのデザインとして仕上げました。

ラッピングし終えたバスが育和小学校へやってくると、子どもたちは自分たちの描いた「みずのみち」がバスの形になって現れたことに満面の笑顔でした。

「水都大阪2009」は、アートと市民参加を手法としてまちづくりムーブメントを盛り上げることを目指しています。このワークショップもその一環で、今後もより多くの人々にこの「水都大阪2009」に参加していただくため、多彩な公募プログラムやワークショップ・イベント等を実施してまいります。

EVENT GUIDE ［イベントガイド］

大阪21世紀協会では、次の各行事を後援・協賛します。みなさまの積極的なご参加、ご支援をお願いします。（平成20年1月25日現在）

	イベント名	日　時	会　場	主催／連絡先
3月～	能と遊ぼう!	3月1日・8日・22日 10:00～11:30	山本能楽堂	（財）山本能楽会 06－6943－9454
	大阪・アート・カレイドスコープ 2008	3月1日～20日 10:00～18:00	大阪府立現代美術センター、 大阪府庁舎、大阪市内各所	大阪府立現代美術センター 06－4790－8520
	大和川・石川クリーン作戦	3月2日	大和川・石川等流域の河川敷 （9市1町における多数の箇所）	大阪府 06－6941－0351（内線 2930）
	OSAKA防衛・防災フェスティバル	3月2日 10:00～16:30	大阪南港ATCとその周辺	大阪防衛協会青年部会 06－6683－0045
	日本の文化に親しむ　おたのしみ茂山狂言	3月6日　1回目 11:30～13:00 2回目 15:00～16:30	そごう劇場	（財）上方文化芸能協会 06－6947－1300
	上方文化再生フォーラム	3月7日 開演 16:00～	TORII HALL	上方文化再生実行委員会 06－6211－2505
	第15回 大阪アウトドアフェスティバル 2008	3月8日・9日 10:00～17:00	インテックス大阪	テレビ大阪（株） 06－6947－1912
	展覧会 「生誕125周年 マリー・ローランサン展」	3月8日～5月11日 10:30～19:30（入場 19:00）	サントリーミュージアム［天保山］	サントリーミュージアム［天保山］ 06－6577－0001
	絵本をつくろう　中川保子絵本を歌うvol.3 ～コンサートから絵本がうまれる～	3月12日 19:00～21:00	ザ・フェニックスホール	Bananan（バナナン） 072－785－4512
	Osaka Prix　第9回 クラシックバレエ・コンクール	3月15日・16日	大阪国際会議場	産経新聞社・産経新聞開発（株） 06－6633－6849
	関西桐朋会 第42回 新人演奏会	3月20日 15:00～18:00	いずみホール	関西桐朋会 078－621－0358
	キティと遊ぼう! ウサハナと踊ろう!	3月20日～4月6日・12日・13日・ 19日・20日・26日～5月6日	ATC特設会場（ITM棟2F館内）	アジア太平洋トレードセンター（株） 06－6615－5006
	2008 全大阪みんよう大賞 大会	3月21日 10:00～18:30（予定）	守口市民会館 さつきホール	（社）全大阪みんよう協会 06－6757－7051
	大阪上町春めぐり	3月22日～5月6日	大阪城を含む上町台地一帯	(株)読売新聞大阪本社 06－6366－1833
	月清古曲保存会伝承と育成の為の～勢乃会～	3月23日 14:00～15:30	国立文楽劇場 小ホール	月清古曲保存会 06－6245－0366
	小品盆栽フェアー「第16回 春雅展」	3月28日～30日 9:30～17:00（30日 16:00）	水の館 （花博記念公園鶴見緑地内）	（社）全日本小品盆栽協会 050－7503－9562
4月～	第50回記念 大阪国際フェスティバル	4月5日・11日・16日・20日・22日・ 5月17日・24日・30日・6月6日・7日・17日	大阪フェスティバルホール	（財）朝日新聞文化財団 06－6227－1061
	たにまち能（山本定期能）	4月5日・7月6日・9月6日・12月7日 13:00～17:00	山本能楽堂	（財）山本能楽会 06－6943－9454
	第12回 なにわ人形芝居フェスティバル ～夕陽丘、花参り～	4月6日 10:00～16:00	大阪市天王寺区下寺町、夕陽丘、 逢坂一帯の寺社、仏閣、劇場	なにわ人形芝居フェスティバル運営委員会 06－6774－2877
	大阪樟蔭女子大学 日本文化塾（芸術と鑑賞）	4月19日～11月29日	大阪樟蔭女子大学 小阪キャンパス、関谷キャンパス及び学外施設	大阪樟蔭女子大学 06－6723－8181
	「伝統と創意」'08日本書芸院展 特別展観 東大寺昭和大納経展 大方廣佛華厳経60巻（仮称）	4月22日～27日 10:00～17:00（入場 16:30）	大阪国際会議場 3階 特設会場	（社）日本書芸院 06－6945－4501
	バリアフリー 2008	4月25日～27日 10:00～17:00	インテックス大阪	（社福）大阪府社会福祉協会 06－6944－9913
	トミカ博 in OSAKA	4月25日～5月5日 10:00～17:00（入場 16:30）	ATCホール	アジア太平洋トレードセンター（株） 06－6615－5006
	第34回 大阪日曜画家展	4月25日～5月9日（日曜日休館） 10:00～18:00（9日 15:00）	大阪府立現代美術センター 展示室 A・B	大阪府立現代美術センター 指定管理者クリーンブラザーズ 06－4790－8520
	大阪ベイエリア祭 第3回「World あぽろん」	4月29日 10:30～18:30	メイン会場：WTCコスモタワー サブ会場：ATC、なにわの海の時空館、サンセット広場	World あぽろん実行委員会 06－6615－6003
5月～	第53回 新世紀展	5月13日～18日 9:30～17:00（入場 16:30）	大阪市立美術館	新世紀美術協会 大阪支部 072－241－0659
	2008 FIG トランポリンワールドカップシリーズ 大阪大会	5月14日～18日	熊取町立総合体育館 （ひまわりドーム）	国際体操連盟（FIG） 06－6940－6309
	第6回 大阪国際室内楽コンクール&フェスタ	5月20日～28日 10:20～21:30	いずみホール	日本室内楽振興財団 06－6947－2184
	（仮）梅谷裕子チャリティーコンサート 世界の子供達に愛を送る	5月23日 18:30～21:00	NHK大阪ホール	梅谷裕子後援会 0798－36－3600
	第22回 帝塚山音楽祭	5月24日・25日 10:00～23:00	大阪市住之江区 万代池公園及び周辺会場	帝塚山音楽祭実行委員会 06－6678－0022
	第15回 共生・共走リレーマラソン	5月25日 7:00～18:00	花博記念公園 鶴見緑地	共生・共走マラソン実行委員会 06－6791－2212

大阪21世紀協会　賛助会員へ入会のお願い

大阪の活性化のため、皆様のご支援をお願いします。

会　費（何口でも結構です）■法人会員　一口につき年会費10万円　■個人会員　一口につき年会費1万円

特　典　①協会が発行する刊行物の配布　②協会が主催する各種セミナーなどへの案内
③賛助会員の参考となる情報・資料の提供など

お問い合せ（財）大阪21世紀協会　渉外グループ　TEL.06-6942-2011

本誌についてのご意見・ご感想をぜひお聞かせください。

［宛先］
〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階
（財）大阪21世紀協会
大阪ブランドセンター　広報誌担当宛　FAX.06-6942-5945

おたがいの　人権守って　明るい社会

誌上舞台

木津川の治水を行った侠客
木津の勘助

案内人
旭堂南左衛門

木津の勘助と申しますのは、本名は中村勘助というお侍。天正十四年（五八六）、相模国足柄山に生まれ、江戸の初めに上方へやって参りまして、木津川の治水や周辺の開発を行いましたので、このような名前で呼ばれております。

講談では、勘助の男っぷりに豪商淀屋が惚れて娘を嫁にやる、その持参金三千両ほどを使うて「大坂夏・冬の陣」で亡くなった人たちを葬ってやったということになっております。数千人もの死骸が大雨でも降ったりしましたら木津川へ流れてくる、それを拾い上げて中洲に埋めておるうちに新田に相成り、上勘助、中勘助、下勘助という島ができたんやそうでございます。

「ほんまかいな」と首をかしげている御仁、“講釈師 見て来たような 嘘を言い”とは申しますが、古地図では大正区三軒家周辺は「勘助島」と記され、浪速区敷津西は旧名を「勘助町」と申すでございます。私、難波周辺を歩いていたおり「勘助橋」の碑、「勘助町」と書かれた町内会の古い看板、勘助を屋号にした店を見つけて嬉しいなった覚えがあります。大国主神社には袴に陣羽織、一本差しの刀の柄に左手を置き、右手には木津川開発の設計図を握った凛々しい勘助像も立っておりますし、豪商の嫁がおったかどうかはさておき、勘助は実在の人物でございます。

「今で言うデベロッパーでエンジニアやな」って、それで終わりではございません。寛永十六年（一六三九）の飢饉では、この勘助、幕府の米蔵を破って多くの人命を救うた義人なんでございます。しかしこれは天下の大罪。本人も元より打ち首・磔は覚悟の上でございましたが「あっぱれな男よ」と特別な計らいを得て、勘助島へ流罪ということになりました。自分で作った島に流すやなんてお奉行様も粋なことをなさいますなぁ。

町のために私財を投げ出し、我が身までくれてやろうという侠気（おとこぎ）。忘れたらあかん、浪速の恩人でございます。

講談

釈台と呼ばれる小さな机を張り扇でパンパン、小拍子でカンカンと叩いて調子を取りながら、歴史にちなんだ物語を読み上げる話芸。

木津勘助翁像（大国主神社内）
地下鉄 御堂筋線・四ツ橋線「大国町」下車すぐ

物語のあらすじ

講談「木津の勘助」

貧しい百姓の勘助は淀屋の主人の忘れ物を拾い、店へ届けます。淀屋がお礼に10両を差し出すと突き返し、相手の無礼をなじります。奉公人は怒りますが淀屋は素直に頭を下げ、勘助は淀屋の度量を見直します。淀屋も勘助の気っ風のよさに感心し、翌日あらためて勘助宅へ礼を述べに行きます。これが縁となって、勘助は淀屋の娘、お直を嫁にもらうことに。

前半は天下の豪商をものともせず正論をはく勘助の小気味よさ、後半はケタ違いの金銭感覚を持つお直が貧乏所帯に嫁ぐというおかしさが聞きどころ。『難波戦記』のような続きものではなく、一席読み切り講談です。

講談師 旭堂南左衛門

兵庫県三田市出身。昭和51年三代目旭堂南陵の弟子となり南学の名をもらう。昭和62年真打昇進、南左衛門を創名。平成3年咲くやこの花賞、平成5年東京国立演芸場花形演芸会金賞受賞。平成17年上方講談協会会長に就任。平成12年に日本テレマン協会主催の『ヘンデル・オラトリオ』に内容解説の講談師として出演し好評を博したのがきっかけとなり、作家・中野順哉と二人三脚で「上方講談」の創作活動を積極的に展開。

講談を聴きに行きませんか

●ゑびす座講談会
毎月下旬 18時30分～ 1500円
会場／道頓堀極楽商店街 6階
交通／各線「なんば」「難波」下車
☎06-6213-4020（ゑびす座）

●上方講談を聞く会
毎月いずれかの木曜日 18時45分～ 1000円
会場／ワッハ上方 4階
交通／各線「なんば」「難波」下車
☎06-6631-0884（ワッハ上方）

●天満講談席
毎月いずれかの火曜日 18時30分～ 1000円
会場／北区民センター会議室
交通／JR「天満」、地下鉄「扇町」下車
☎06-6315-1500（区民センター）

財団法人 大阪21世紀協会
ホームページ http://www.osaka21.or.jp
発行日／平成20年2月26日
発行・編集／財団法人大阪21世紀協会 〒540-0032 大阪市中央区天満橋京町1-1 大阪キャッスルホテル4階 TEL.06(6942)2001 FAX.06(6942)5945
発行人／佐々木洋三　編集／大阪ブランドセンター　編集協力／株式会社インサイト　印刷／株式会社NPCコーポレーション
本誌は再生紙を使用しています。